

留学生による国際ボランティア活動・スタディツアーの考察

— 日本経済大学ユネスコクラブの留学生による「カンボジア国際ボランティア」—

A Study of International Volunteering and Study Trips by Oversea Students in a Japanese University : Experiences in Cambodia of the UNESCO Club of the Japan University of Economics, Kobe Japan

安井 裕司[※]

Hiroshi Yasui[※]

In the last few years, increasing numbers of overseas students have come to Japan to receive higher education. In 2015, over 200,000 foreign students were enrolled in Japanese institutions. In terms of volunteering activities, these foreign students are in transition from a receiver of volunteering as guests from abroad to becoming active volunteers to help others. In this article, I focus on the experiences of overseas students from China, Mongolia and Vietnam who, as members of the UNESCO Club of the Japan University of Economics, Kobe, Japan, took part in a Cambodian volunteering tour organised by an NGO, the Kobe UNESCO Association in November 2016. Their volunteering experiences in Cambodia could be a good example for other overseas students in Japan to contribute internationally irrespective of their nationalities as members of NGOs in Japan.

1. はじめに

2016年11月17日から2016年11月23日まで、日本経済大学神戸三宮キャンパスのユネスコクラブに所属する学生6名と顧問1名（筆者）が、神戸ユネスコ協会の会長・理事の計4名⁽¹⁾と共に同協会が主催する「カンボジア国際ボランティア」⁽²⁾に参加し、カンボジア王国を訪れた。

同大学ユネスコクラブの学生たちは、カンボジア・コンポンチュナン（Kampong Chhnang）州の貧困地域にある小学校二校、同国コンボンスプー（Kampong Speu）州にある児童養護施設「夢ホーム」、日本ユネスコ協会連盟プノンペン事務所が運営する同国シェムリアップ（Siem Reap）州にある二カ所の「寺子屋」（途上国における識字率向上のための社会人向け Community Learning Centers）⁽³⁾を訪問

※日本経済大学経済学部商学科

(1) 顧問である筆者は、神戸ユネスコ協会の理事でもあるため、筆者も加えると理事は5名になる。

(2) 神戸ユネスコ協会のカンボジア支援は、2012年に遡るが、「カンボジア国際ボランティア」という名称は日本経済大学ユネスコクラブの学生が参加した2015年度からである。

(3) 「寺子屋運動」は、1990年から始まった日本ユネスコ協会連盟の途上国支援のプロジェクトであるが（国際識字年記念“世界寺子屋運動”NGOフォーラム名古屋・1990実行委員会 1991：139-158）、その名の通り、日本の江戸時代における庶民の教育機関である「寺子屋」から名付けられたものである（National Federation of UNESCO Associations in Japan 2005：20；日本ユネスコ協会連盟 2004：13；2005：21；2006：3-5；富岡 2013：67）。カンボジアでは2006年からシェムリアップ州で展開している（安達 2015：41；日本ユネスコ協会連盟 2017b）。

【表1】 神戸ユネスコ協会「カンボジア国際ボランティア」旅程

月 日	内 容	宿 泊 地
11月17日(木)	午前：関西国際空港発 午後：同日ベトナム航空を利用し、ベトナム・ホーチミン経由でカンボジアの首都プノンペン入り	プノンペン泊
11月18日(金)	コンボンチュナン州ロミアス村ストイックアイトロミア小学校にてボランティア活動	プノンペン泊
11月19日(土)	コンボンチュナン州ソカーオン小学校にてボランティア活動	プノンペン泊
11月20日(日)	午前：コンボンスプー州の児童養護施設「夢ホーム」にてボランティア活動 午後：夕方からバスで6時間かけてシェムリアップへ移動	シェムリアップ泊
11月21日(月)	午前：日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所長・ノン・ブッタ氏による講演「カンボジアの寺子屋活動について」、「カンボジア近現代史」を聴講（於・シェムリアップ・アンコールホテル） 午後：シェムリアップ州リエンダイ寺子屋復学支援クラス訪問、同州ドンアウ村リエンダイ寺子屋夜間サテライト教室訪問	シェムリアップ泊
11月22日(火)	午前：ユネスコ世界遺産アンコールワット訪問 午後：シェムリアップ空港からベトナム航空を利用し、ホーチミン経由で関西国際空港へ	機内泊
11月23日(水)	関西国際空港着	

【表2】 2016「カンボジア国際ボランティア」費用（学生1人分、朝食以外の食事代は含まれない）

名 目	詳 細	価 格
飛行機代（往復）	関西国際空港～プノンペン空港 シェムリアップ空港～関西国際空港	57,230円
ホテル代3泊（プノンペン）	1部屋2人利用	5,000円（1人分）
ホテル代2泊（シェムリアップ）	1部屋2人利用	7,000円（1人分）
カンボジア国内 バス代、通訳代	カンボジアにおける7日間の小型バス代、5日分の通訳	17,000円（1人分）
日本国内 空港バス代	神戸～関西国際空港（往復）	3,080円
保険代	旅行保険	2,500円
合計		91,810円

し、短期間ながら充実したボランティア活動の日々を送った。

日本経済大学神戸三宮キャンパス・ユネスコクラブは、留学生を中心に2013年末に同キャンパスにて創部され、翌年の2014年4月以降、同クラブの学生は、同時に神戸地区の民間ユネスコ協会である神戸ユネスコ協会⁽⁴⁾の青年部の会員となり、神戸地区を中心にボランティア活動に従事している⁽⁵⁾。

神戸ユネスコ協会のカンボジア支援は、2012年、同協会の加藤義雄会長が中心となってコンボン

(4) 神戸ユネスコ協会は1947年12月11日に設立されている（神戸ユネスコ協会2015）。日本では仙台ユネスコ協会、京都ユネスコ協会等と共に最も古い民間ユネスコ協会の一つである。

(5) 例えば、2016年は、神戸国際交流フェア2016会場ボランティア（3月）、第15回Kobe Love Portみなとまつり模擬店出店（7月）、第46回みなとこうべ海上花火大会・清掃ボランティア（8月）、2016平和の鐘を鳴らそう運動・神戸湊川公園（8月）等のイベントに参加している。

【表3】 2016年神戸ユネスコ協会「カンボジア国際ボランティア」参加者

名 前	出 身	学年	性別	カンボジア国際ボランティア 参加回数
余丹	中国福建省	4 年	女性	2 回目
趙敖日格樂	中国内蒙古自治区	4 年	男性	2 回目
温曉亜	中国山西省	3 年	女性	1 回目
ダワードルジ・エンフツェツェグ	モンゴル共和国	2 年	女性	1 回目
フイン・タイン・フエン	ベトナム共和国	2 年	男性	1 回目
孟萌	中国遼寧省	1 年	女性	1 回目

チュナン州の貧困地域であるロミアス村に神戸ユネスコ小学校（正式名ストイックアイトロミア小学校）を建設したことから始まり、会長、理事が毎年、1 回から 2 回の現地訪問を続け、支援を継続している。

日本経済大学ユネスコクラブの部員は、2015年度から神戸ユネスコ協会のカンボジア・プロジェクトにも加わり、2016年11月17日からのカンボジア訪問はクラブとして 2 年連続、2 度目であった⁽⁶⁾。

2016年度の「カンボジア国際ボランティア」への参加者は、神戸ユネスコ協会理事とクラブ顧問の教員を除き、6 名全員が日本経済大学に在籍する留学生であり、その内訳は中国出身 4 名、ベトナム出身 1 名、モンゴル出身 1 名となっていた【表3】。中国出身者も、福建省、内蒙古自治区、山西省、遼寧省と出身地域が異なっており、6 名のバックグラウンドは多様である⁽⁷⁾。

これは日本の NGO である神戸ユネスコ協会（日本ユネスコ協会連盟加盟）⁽⁸⁾主催の国際貢献プログラムに、日本の大学に所属する多国籍に跨る留学生が主体的に参加した点においてユニークな例であると考えられる。

従来、留学生研究におけるボランティアといえば、来日した留学生を支援する方法の一つとして認識されてきた（名古屋国際センター 1991；奥川・梶川 1996；金田 2001；岡 2009；岡山大学国際センター 2014）。しかしながら、2008年に「留学生30万人計画」が公表され（文部科学省 2008）、同計画と共に私費留学生の受け入れ拡大が進むと、留学生支援も転換期を迎えざるを得なくなる。留学生の増加に対して、大学や自治体からの公的支援も、日本人学生によるボランティア支援も厳しくなっており、各大学が新たな課題に直面している（福島 1997：90；岡山大学国際センター 2014：419；渡部 2016：4）。

2015年5月1日現在、日本の高等教育機関に在籍する留学生数は、20万人⁽⁹⁾に至っている。留学生

(6) 2015 年の神戸ユネスコ協会の「カンボジア国際ボランティア」は 2015 年 11 月 21 日から 2015 年 11 月 25 日の日程で催された。日本経済大学ユネスコクラブ所属の中国からの留学生である陳蕾蕾（当時 3 年、山東省出身）余丹（3 年、福建省出身）、趙敖日格樂（3 年、内蒙古自治区出身）、王世玲（2 年、福建省出身）の 4 名が参加した。

(7) ボランティア期間中の共通言語は基本的に日本語を用いた。カンボジア人の通訳者（日本語からカンボジアの公用語であるクメール語に通訳）を雇ったが、ベトナム出身のユネスコクラブ部員のフイン・タイン・フエン君（2 年）がクメール語も話すため、通訳者が不在の際は、副次的に英語及びクメール語を用いた。

(8) 現在、日本には約 270 の民間ユネスコ協会が存在している（日本ユネスコ協会連盟 2017a）。

(9) 2015 年 5 月 1 日において、日本の大学院・大学（学部）・短期大学・高等専門学校・専修学校・準備教育課程・日本語教育機関に在籍する留学生数は、208,379 人に至っている（日本学生支援機構 2016）。

は以前と比較し、特別視されない環境の中にあり、今後、日本の生活にも馴染んだ留学生が日本人と共に、ボランティアをする側となることも珍しくなくなるであろう。留学生の主体的なボランティア参加は、ボランティア活動に活性化にとっても、留学生の孤立化を避けるためにもむしろ望ましいとされる（門倉 2000：22）。

しかしながら、留学生が参加するボランティア活動に関する調査・研究は幾つかの例外を除き、殆ど行われおらず、実態が把握できていない（渡部 2016：1）。それ故に、本論では、留学生によるボランティア活動に着目したい。神戸ユネスコ協会の「カンボジア国際ボランティア」は、一つのケーススタディにしか過ぎないが、今後も日本で増加する留学生の大学生生活の新しいあり方として捉えることができるのではないだろうか。

2. 留学生によるボランティア活動の先行研究

留学生によるボランティア活動に関する先行研究は、日本国内の大災害におけるボランティアへの合流、生活圏において留学生がそれぞれの母語を使ったボランティア活動に従事するケースに分けられる。その上で、留学生のボランティア活動は、日本人を対象に実施されたものと日本に住む外国籍の子供たちを対象に実施されたものに大別できる。

まず、第一に大地震の際に在日留学生がボランティアに参加したケースである。例えば、2011年の東日本大震災発生後、韓国からの留学生が仙台のボランティアセンターに登録し、20日間、民家の泥出しの作業などに参加している（許 2011：13-15）。熊本震災では、留学生も加わる海外在住ネパール人協会（Non Resident Nepali Association）がネパール地震への日本からの支援に対する「恩返し」として、ボランティア活動を行っている（Embassy of Nepal Japan 2016）。

留学生が母語を用いてボランティアに参加するケースとしては、2010年から始まった大分県別府市の留学生による小学生への絵本読み聞かせのボランティア活動がある（工藤・佐藤・松浦・里中・小串・寺本・神野・上野 2013；里中・瀧上 2014）。英語や中国語、韓国語を用いた読み聞かせは子供たちにとっても留学生にとっても異文化交流の効果が大きいと結論付けられている。

更に、松本（2001）による留学生の一定期間に渡る長崎大学医学部付属病院ボランティア活動の研究がある。松本（2001：38）は、留学生が日本人の患者と交流することによって、①「自分が誰かの役に立っているという実感」、②「日本語でコミュニケーションをとることでの自信」、③「患者との信頼関係を得ることで新しい人間関係」などが得られると指摘している。

最後に、留学生が母語を用いて、日本に滞在する外国人を母国語でサポートするケースは、近年、日本語を母語としない児童が増加していることが前提にある（福岡 2009：多原 2011）。福岡（2009）は、三重大学と京都外国語大学に在籍する留学生による、三重県鈴鹿市と松阪市に定住する外国籍の小学生への教育支援を調査している。それは、外国籍で日本に長期滞在する二世が抱える教育問題という新しい課題に対し、異国から日本の大学に学びに来た留学生が子供たちの母語（留学生の母語）であるポルトガル語、スペイン語、カタログ語、中国語を用いて、子供たち夏休みの宿題を手伝うというユニークな試みである⁽¹⁰⁾。

母語を用いて子供たちの学習支援ボランティアに参加した留学生たちは、「皆さんに教えに行きましたが、皆さんからも教わりました」、「自分もさらに日本で頑張らなければならない気持ちが出てきました」（福岡 2009：59）等と答え、ボランティアに参加した留学生たちにとっても交流が「学びの場」になっていることが分かる。

上記の通り、留学生によるボランティア活動は、学習効果があり、精神的安定にも寄与しているとみなされている。日本に滞在する留学生数が20万人を超え、30万人に向かおうとしている現在、留学生自身が様々なボランティア活動に従事できる環境を整えることも、有意義な留学生支援の一環となる。

3. 海外スタディツアー/国際ボランティアとは何か

次に、海外スタディツアーと国際ボランティアの定義を確認し、日本経済大学ユネスコクラブの留学生のカンボジアでのボランティア活動を位置付けたい。

近年、日本の大学は座学のみならず「現場」での体験や実習を重視しており、国際化、グローバル化に伴う大学の変革は、その「現場」を海外に求め、海外旅行慣れした学生たちも「歩く旅」から「学ぶ旅」に関心が移り、海外スタディツアーや海外ボランティアが開発されてきた（市原 2004；藤原・栗山 2014：47；金 2016：52-75）⁽¹⁰⁾。

海外スタディツアーの一般的な定義は、「NGO（国際交流・協力の市民団体）、大学・学校、自治体、宗教団体などが組織的かつ継続的に、相互理解や体験学習を目的として行うツアー」（藤原 2014：36）であり、具体的な内容としては「観光のみならず、現地事情や NGO による活動などの学習、現地の団体や人々との双方向的な交流、参加者自らの参加、体験、協力などが可能なプログラム」（同上）となっている。

実際には、大学が主体になって行っている例が多く、単位が認められることもある。また、ゼミ合宿を海外スタディツアーとして行っているケースもある（安井 2016：299-301）。大学のグローバル化が求められる近年、各大学はスタディツアーをカリキュラム化する傾向があると言える⁽¹²⁾。

ボランティアの定義については、「自発性」「非営利性」「公共性」という3つの柱が共通認識になっている（入江 1999：5、内海 2011：5）⁽¹³⁾。

自発性に関しては、英語のボランティア（volunteer）の語源がラテン語の Volo（志す、進んで行

(10) また、多原（2011）は、同じく三重大で、自らが在日ブラジル人の小学生、中学生、高校生の学習教育を行う「ジョイア」という学習サークルに在籍して、ポルトガル語を用いてボランティア活動に従事した例を対象として分析している。

(11) 1990年代後半以降の大学の教員に NGO や国際協力機関出身者が多数採用されたことによって、海外現地体験学習がカリキュラムの一環とされるようになってきたことも挙げられる（藤原・栗山 2014：47）。

(12) 2008年の高橋（2008：150）の論文によれば、国際協力を行う日本の市民組織（NGO）の活動の促進及び強化を図るネットワークである「国際協力 NGO センター」（JANIC）に登録する約400の NGO のうち、約半数がスタディツアーを実施しており、年間総計500回から600回のツアーが行われているとしている。NGO 主催のスタディツアーへの参加者は、年間で延べ1万人を超えると推定され、大学や地方自治体等が実施するツアーも含めると、参加者数は当時において約3万人とみなされていた（同上）。

(13) この3つの特性に「先駆性」を加えることもある（長沼 2008：37）。

う)であり、「誰からも強制されない」自由意志が重要とされる(山田・内海 2014: 12-15)。更に必要なことは、1回だけのツアー的なイベントではなく、計画性と継続性が求められる(同上)。

次の非営利性に関しては、無償を前提とする定義(新出 1998: 2473)⁽¹⁴⁾、名誉や達成感などの精神的利益(中村 2005: 20-23)、社会的賞賛や大学の単位の取得、企業イメージの向上、経費を含む有償ボランティアまで含むケースもあるが(山田・内海 2014: 15)、いずれの場合もその行為が利益追求を目的としていないことが基本となる。

公共性とは、他者や社会に何らかの意味を持って役立つことを指している(内海 2011: 7)。ボランティア活動の目的やニーズが共観可能であり、その参加もある程度開かれているべきであるとされる(山田・内海 2014: 16)。

国際ボランティアの国際性については、単に日本人が海外で行うボランティアに留まらず、国際化、グローバル化によって国内にも外国人が増加しており、ボランティアは活動の場が国内であろうと国外であろうと、「国際性」を帯びていっているとされる(山田・内海 2014: 18)。

4. カンボジアへの国際ボランティア/スタディツアー

カンボジアには、毎年、多くの日本人学生が、国際ボランティア及びスタディツアーを目的として訪れている。

国際協力機構(JICA)カンボジア事務所が何らかの形で関わったスタディツアーは、2004年には年間34件、2005年には年間51件であったが、2015年において約100件となっている(高橋 2008: 151; 国際協力機構 2016)。JICAを通さないスタディツアーも少なくないことから、カンボジアには毎年数百単位のスタディツアーが組まれていると考えるべきであろう。

カンボジアがスタディツアーとして選ばれる理由としては、カンボジアは貧富の格差が著しく、日本社会と政治、経済、社会等が大きく異なるため、学生たちが、その実態を肌で感じることで多様な価値観や人間観を理解し(中山・澤田・谷野 2013: 139; 木下・福岡 2014: 141)、既存の安定した自己と社会観や世界観の枠組みを再構築し(駒澤大学文学部社会学科坪井ゼミ 2013: 2; 坪井 2014: 2; 鈴木・田中・金塚・中和 2014: 241; Schaaff 2014: 77)、現代社会の構造や人々の在り方生き方をグローバルに考える機会を得られることが挙げられている(久保園 2015: 28)。

また、ポル・ポトによるクメール・ルージュ政権(1975年-1979年)の大虐殺の歴史やアンコールワット遺跡群などの世界的遺産など、学生たちにとって学ぶべきテーマが見つかり易いことも事実であろう(室井 2009: 10-13; 木村 2012: 8-9; 小木曾 2012: 35-36; 坪井 2013: 32; 2014: 2)。

更に、カンボジア国民は概して親日的であり、様々な施設を訪問して現地の人々と密に交流することが可能である(坪井 2013: 32)。そして、近年、治安も比較的安定しており、万が一の際でも大学やNGOが緊急時の対応ができる環境があることも重要な要素とされる(岡島 2010: 8)。

上記のような点から、カンボジアは、日本の大学生にとって海外における短期の「学び場」として貴重なフィールドとなっていることが理解できる。

(14) 『広辞苑』では「ボランティア」を「(義勇兵の意) 志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」(新村 1998: 2473)としている。

5. 神戸ユネスコ協会「カンボジア国際ボランティア」

今回、日本経済大学ユネスコクラブの6名の留学生たちは、神戸ユネスコ協会がカンボジアで展開するボランティア活動（小学校支援と児童養護施設支援）を行い、日本ユネスコ協会連盟が同じくカンボジアで行う識字率向上のための「寺子屋」（シェムリアップ州リエンダイ寺子屋復学支援クラスと同州ドンアウ村寺子屋夜間サテライト教室の二カ所）を訪問した。

まず、神戸ユネスコ協会のカンボジアにおけるボランティア活動は小学校支援と児童施設支援に分かれる。

小学校支援は、前述の通り2012年に神戸ユネスコ協会がコンボンチュナン州ロミアス村に小学校（ストイックアイトロミア小学校）を建設したことから始まる。以降、毎年、1回か2回、同協会の会長、理事が訪問し、ハード及びソフト面において学校のメンテナンスを行っている。毎回、小学校における滞在は1日か2日であるが、神戸ユネスコ協会の年間の活動を通じて、募金等、継続的な支援をしている。

今年度は、ストイックアイトロミア小学校へ神戸ユネスコ協会が資金を出し、建設した小さな図書館（図書室）を寄贈しており、滞在2日目（ボランティア初日）に、図書館のオープニングと本の寄付を行った。日本経済大学の学生たちは、漫画本や色紙等それぞれの企画によって道具を持参した。更に、神戸に本店がある「焼肉六甲」にご協力して頂き、日本型の「給食」を企画した。6人の学生も神戸ユネスコ協会の理事たちと共に、子供たちに「牛飯」を振舞った。

ストイックアイトロミア小学校の運営が軌道に乗ったこともあり、今回、3日目（ボランティア2日目）は、より貧困地域にあるコンボンチュナン州ソカーオン小学校を訪問し、歯ブラシなどの支援物資を提供し、歯の磨き方等の衛生教育を中心とした授業を行った。

4日目（ボランティア3日目）はコンボンスプー州の児童養護施設「夢ホーム」を訪問した。「夢ホーム」の支援は、神戸ユネスコ協会がストイックアイトロミア小学校を建設する際、「夢ホーム」を運営するNPO法人「21世紀のカンボジアを支援する会」に協力して頂いたことがきっかけとなっている。現在、「夢ホーム」には何等かの理由で親と暮らせない13名のカンボジアの子供たちが滞在しているが、農村の貧困地域とは異なる都市の貧困問題が横たわっており、訪問した留学生たちも考え込む場面も少なくなかった。

4日目の夕刻からカンボジアの首都プノンペンからシェムリアップにバスで移動し、5日目はシェムリアップ州にある「寺子屋」を訪問した。

「寺子屋」と呼ばれるコミュニティ・ラーニング・センターは、1990年以降、日本ユネスコ協会連盟がアフガニスタン、カンボジア、ベトナム、ラオス、ネパール、インド、バングラデッシュ、パキスタン等の途上国の貧困地域に教室を建設し、識字率向上を図っているプロジェクトである（日本ユネスコ協会連盟 2017b）。カンボジアでは現在、同国のシェムリアップ州20か所の村で、主に教育の機会が得られなかった成人を対象に「識字クラス」を行っている（日本ユネスコ協会連盟 2017c）⁽¹⁵⁾。

シェムリアップ州ドンアウ村の「寺子屋」夜間教室を訪れると、一生懸命、文字を覚えようとしているカンボジアの大人たちを前に、留学生たちは、どのように話しかけるべきか戸惑っていた。

【表4】 シェムリアップ州ドンアウ村「寺子屋」夜間サテライト教室での歌唱

歌った人	曲 名	言語
ダワードルジ・エンフツェツェグ	Maamuu naash ir	モンゴル語
余丹	小二郎	中国語
孟萌	世上只有妈妈好	中国語
趙敖日格樂	モンゴル字母歌	モンゴル語
フイン・タイン・フエン	AI DANG DI TREN BO DE	ベトナム語
神戸ユネスコ協会理事チーム	犬のおまわりさん	日本語

しかしながら、前述の通り、日本経済大学ユネスコクラブの学生たちが全て留学生（中国、モンゴル、ベトナム）であるという国際性は予期せぬ「化学反応」を起こした。

プログラムの勉強が終了後、「交流会」となり、日本経済大学の学生たちがそれぞれの母語である中国語、モンゴル語、ベトナム語で、神戸ユネスコ協会理事の日本人チームが日本語で1曲ずつ童謡や子守歌を歌った【表4】。それに対して、「寺子屋」の社会人学生たちもカンボジア語で「あなたに逢えてよかった」という意味の歌を返して、多国籍に跨る国際交流が成立して、大いに盛り上がり「お祭り」のような雰囲気となった。短時間でありながらも、単なる2国間交流ではなく、「寺子屋」の社会人学生の方々の「コミュニティ」に学生たちが歓迎されているかのようであった。

現実として、シェムリアップ州ドンアウ村は、多くの男性が出稼ぎのため海外に滞在しており、「寺子屋」夜間教室の参加者は女性と子供（30名程）だけであった。そのような環境で「コミュニティ」の維持が難しいのは一目瞭然である。

日本ユネスコ協会連盟がアジア各国で展開する「寺子屋」（Community Learning Centers = CLC）は、単なる「学びの場」のみならず、地域の公民館として「コミュニティ」を維持し、時に再生する役割が課せられている（関口 2010：140）。河内（2010：94）は、ユネスコ側の考え方として、アジア太平洋地域の「コミュニティ」のラーニングセンターが機能するためには、教育施設という物理的存在のみではなく、生涯学習の必要性や地域づくりにおける地域住民の主体性という CLC に伴う価値を地域住民が受容しなければいけないとしながらも、現実には地域住民による主体的な受容は困難であるという見解を示している。

もし、留学生の多国籍ボランティア・チーム訪問が、カンボジアの村の寺子屋の人々の主体性の構築に多少であっても効果的であるとすれば、このような交流をより促進させるべきであろう。

(15) 日本ユネスコ協会連盟も、日本各地の地域協会がアジア各地の「寺子屋」を訪れることを「スタディツアー」と称している（日本ユネスコ協会連盟 2005：20）。カンボジアでの「寺子屋」訪問は、日本経済大学ユネスコクラブの学生たちにとって、日頃の活動の延長上にある小学校支援とは異なり、「視察」に過ぎなく、継続性と前提とするボランティアというより、一種のスタディツアーと捉えるべきであろう。

6. 結 論

上記のスタディツアーと国際ボランティアの定義に則して考えると、日本経済大学ユネスコクラブは大学公認の部活動であり、「カンボジア国際ボランティア」は卒業単位としては認められないが、大学における部活動の海外スタディツアーと捉えることができる。同時に、NGO 団体である神戸ユネスコ協会によるカンボジア支援の一環でもあり、「自発性」「非営利性」「公共性」のいずれから見ても、国際ボランティアの条件を満たしているであろう。

スタディツアーであり、ボランティア活動であったことは、楽しみながら、かつ学びながら（時に考え込みながら）貢献するという姿勢に繋がった。学生たちは全員が最終的には「楽しかった」という感想を述べており、無理なく、自分たちの喜びとして、ボランティア活動に従事できたと言える。

しかしながら、幾つかの課題も残された。

まず、日本経済大学ユネスコクラブの日本国籍の学生が参加しなかったことで、日本人学生と留学生のコラボレーションによる「カンボジア国際ボランティア」とならなかった。日本人学生も加われれば、よりアイデンティティが多様になり相乗効果が見込まれるのではないだろうか。

また、日本経済大学ユネスコクラブとしては、出発直前に何度かの勉強会も行い、帰国後は研究発表会を開催しているが、スタディツアーとして捉えれば、ボランティア活動を十分に教育プログラムに反映できたかどうかを検証するべきであろう。

更に、訪問日程の5泊7日という短期間でできることは限られており、日頃からの支援の現地発表的な位置付けであったとせよ、より長期的にコミットし、支援も「見えるモノ」から「見えない知識」への変化が求められていることを痛感した。

最後に、費用の問題もある。交通費、宿泊費、食事代を含めて総額で1人10万円程かかっている【表2】。1週間の海外滞在としては高くないとしても、学生にとっては安いとは言えず、参加の意思があっても経済的に断念する学生も少なくなった。

このような課題があるとはいえ、日本経済大学ユネスコクラブの留学生たちが、神戸ユネスコ協会主催の「カンボジア国際ボランティア」に参加し、十分に楽しみ、多くを学んだことは、日本に学ぶ留学生20万人時代の一つの新たな挑戦として認識されるべきであろう。

参考文献

- 安達仁美 (2015). 「ユネスコ世界寺子屋運動カンボジアプロジェクト」, 社協情報.
- 市原芳夫 (2004). 『スタディ・ツアーのすすめ』, 岩波書店.
- 入江幸男 (1999). 「ボランティアの思想」, 内海成治、入江幸男、水野義之 (編), 『ボランティア学を学ぶ人のために』, 世界思想社.
- 内海成治 (2011). 「ボランティア論から見た国際ボランティア」内海成治、中村安秀 (編), 『国際ボランティア論』, ナカニシヤ出版.
- 岡益己 (2009). 「留学生 30 万人計画を視野に入れた留学支援ボランティアの活用」, 大学研究教育紀要.
- 岡島克樹 (2010). 「パートナーシップとコミュニケーションに基づくリスク対策－大阪大谷大学人間社会学部カンボジアスタディツアーの事例」, 留学交流, 22(5).
- 岡山大学国際センター (編) (2014). 『岡益己教授留学生支援論集』, 和光出版.

- 小本曾宏 (2012). 「施設を訪ねてベトナム・カンボジア「子ども家庭福祉」事情：ハノイ・プノンペン・スタディツアー報告」, 児童養護, 43(3).
- 奥川義尚・梶川裕司 (1996). 「在日留学生と日本人ボランティアの交流実態に関する一考察」, 京都外国語大学研究論叢, 49.
- 門倉正美 (2000). 「大学における国際交流ボランティア—その現状と可能性」, 横浜国立大学留学生センター紀要, 第7号.
- 金田智子 (2001). 「学生ボランティア制度の現状と諸問題—『広島大学国際交流ボランティア』発足から2年半を経て—」, 広島大学留学センター紀要, 11.
- 河内真美 (2010). 「ユネスコ事業にみるコミュニティ学習センターの役割」, 日本公民館学会年報7号.
- 木下照子・福岡悦子 (2014). 「2013年度 カンボジア・スタディツアーでの学生の学び」, 新見公立大学紀要, 第35巻.
- 木村佐枝子 (2012). 「国際ボランティアの教育的意義—学生主体によるカンボジア教育支援プロジェクトを中心に—」, 国際貢献ジャーナル, 第1巻, 第1号.
- 許真 (2011). 「ボランティア 今でできること」, アジアの友, 2011年4-5月号, 第490号.
- 金敬熙 (2016). 「海外スタディツアーにみる大学と地域社会の現状と課題」, 中京大学社会科学研究所 (編), 『大学と地域社会の連携』, 中京大学社会科学研究所.
- 工藤英明・佐藤則好・松浦倫・里中玉佳・小串ナナ子・寺本真悠子・神野未翔子・上野千種 (2013). 「留学生の絵本読み聞かせボランティア活動の報告」, 別府溝部学園短期大学紀要, 第33号.
- 久保園梓 (2015). 「社会参加学習におけるリフレクションの意義と可能性：高等学校におけるカンボジア・スタディツアーを事例として」, 中等社会科教育研究, 第34号.
- 神戸ユネスコ協会 (2015). 「神戸ユネスコ協会について」, 神戸ユネスコ協会 HP <http://www.unesco.or.jp/kobe/about.html>, (2017年1月25日 閲覧).
- 国際協力機構 (2016). 「NGO-JICA ジャパンデスクスタディーツアーの内容」カンボジアオフィス <https://www.jica.go.jp/cambodia/office/about/ngodesk/studytour02.html>, (2017年1月25日 閲覧).
- 国際識字年記念「世界寺子屋運動」NGO フォーラム名古屋・1990 実行委員会 (1991). 『すべての人に教育を：国際識字年記念「世界寺子屋運動」NGO フォーラム名古屋・1990 報告書』, 中央出版株式会社.
- 駒澤大学文学部社会学科坪井ゼミ (2013). 『共同研究カンボジア国際交流とスタディーツアー 2012 年度』, 駒澤大学文学部社会学科坪井研究室.
- 里中玉佳・渕上裕賢 (2014). 「留学生の絵本読み聞かせボランティア活動の報告」, 別府溝部学園短期大学紀要, 第34号.
- 新村出編 (1998). 『広辞苑』, 岩波書店.
- 鈴木光男, 田中真奈美, 金塚基, 中和渚 (2014). 「カンボジア・ボランティア・プログラムを通じた学士力の育成」, 東京未来大学研究紀要, 第7号.
- 関口宏隆 (2010). 「世界寺子屋運動の諸相—運動20周年を振り返って」『日本公民館学会年報』, 第7号.
- 高橋優子 (2008). 「スタディーツアーの教育的意義と課題—JICA カンボジア事務所での経験に基づいて」, 筑波学院大学紀要, 第3集.
- 多原明美 (2011). 「留学生体験やボランティア活動を通してみた外国人生活者のニーズ」, 都市住宅学, 74, 36-41 頁.
- 坪井健 (2013). 「カンボジア学生交流とスタディーツアーを実施して」(国際アジア文化学会二十周年記念号；特集国際アジア文化学会二十周年記念), アジア文化研究, 第20号.
- 坪井健 (2014). 『カンボジア・スタディーツアーの教育的効果と可能性に関する実証的研究』, 駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室.
- 富岡守 (2013). 「寺子屋師匠はボランティア」, 新島学園短期大学紀要, 第33号.
- 長沼豊 (2008). 『新しいボランティア学習の創造』, ミネルヴァ書房.
- 中村安秀 (2005). 「災害現場のコラボレーション—ボランティアの立場から」, 緊急医療ジャーナル, 76.
- 中山亜弓・澤田由美・谷野宏美 (2013). 「発展途上国との国際交流から得た学生の学び—2012 年度カンボジア・スタディーツアー報告—」, 新見公立大学紀要, 第34巻.
- 名古屋国際センター (1991). 「私たちにもできる留学生支援」, 『ボランティアステップアップ講座：国際協力・留学生支援私たち一人ひとりができること』, 名古屋国際センター.
- 日本学生支援機構 (2016). 「平成 27 年度外国人留学生在籍状況調査結果」, http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html (2017年1月25日 閲覧).

- 日本ユネスコ協会連盟 (2004). 「寺子屋レポート 2004」 社団法人日本ユネスコ協会連盟.
- 日本ユネスコ協会連盟 (2005). 「寺子屋レポート 2005」 社団法人日本ユネスコ協会連盟.
- 日本ユネスコ協会連盟 (2006). 「寺子屋レポート 2006」 社団法人日本ユネスコ協会連盟.
- 日本ユネスコ協会連盟 (2017a). 「日本各地のユネスコ協会」, ホームページ <http://www.unesco.or.jp/unesco/local/> (2017 年 1 月 25 日 閲覧).
- 日本ユネスコ協会連盟 (2017b). 「途上国の教育支援世界寺子屋運動」, ホームページ <http://www.unesco.or.jp/terakoya/> (2017 年 1 月 25 日 閲覧).
- 日本ユネスコ協会連盟 (2017c). 「識字教育がもたらす「変化」」 ホームページ <http://www.unesco.or.jp/terakoya/news/2017/> (2017 年 1 月 25 日 閲覧).
- 福岡昌子 (2009). 「『実践：日本語教育 1&2 2007』企画実施報告(2) 2. 『夏休みの宿題の助っ人－留学生の母語による学習支援』」, 三重大学国際交流センター紀要, 第 4 巻.
- 福島みちこ (1997). 「身近な留学生の地域交流とボランティア」, 大学時報, 第 46 巻, 第 255 号.
- 藤原孝章 (2014). 「特定課題研究プロジェクトについて」(特集海外研修・スタディツアーと国際理解教育特定課題研究プロジェクト海外研修・スタディツアーと国際理解教育), 国際理解, 第 20 巻.
- 藤原孝章, 栗山丈弘 (2014). 「スタディツアーにおけるプログラムづくり－「歩くたび」から「まなぶ旅」への転換－」, 国際理解教育, Vol.20, 2014 年 6 月.
- 松本久美子 (2001). 「ボランティア活動を通しての主体的な地域社会参加の試み－留学生による病院でのボランティア活動を事例として」, 広島大学留学生教育, 5.
- 室井美稚子 (2009). 「カンボジアでのスタディ・ツアーの可能性を探る」, トランセンド研究, 第 7 巻, 第 1 号.
- 文部科学省 (2008). 「『留学生 30 万人計画』骨子の策定について」報道発表 平成 20 年 7 月 29 日 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm (2017 年 1 月 25 日 閲覧).
- 安井裕司 (2016). 「『国際合同ゼミ合宿・国際研究発表会』の考察：多国籍に跨る学部学生による国際交流」, 日本経大論集, 45 巻, 2 号.
- 山田恒夫, 内海成治 (2014). 「国際ボランティア学とは」, 山田恒夫 (編), 『国際ボランティアの世紀』, 放送大学.
- 渡部留美 (2016). 「留学生支援における大学と地域ボランティアの連携に関する一考察」, 留学生教育, 第 21 号.
- Embassy of Nepal Japan (2016). 「在日ネパール人による感謝と追悼セレモニー～新宿、名古屋、難波、博多など全国 26 カ所で開催～」, 2016 年 5 月 25 日.
- National Federation of UNESCO Associations in Japan (2005). *Terakoya Report 2005*, Tokyo : National Federation of UNESCO Associations in Japan.
- Schaaff, George (2014). Cambodia Study Tour Revisited : Refining the Experience and Finding a Research Focus. *Journal of International Studies*, Vol.3 No.1, School of International Studies, Kwansei Gakuin University.